

## 本居宣長手沢本『新古今和歌集』における本歌書入

藤井 嘉章

### Motoori Norinaga's Handwritten Honka Notes in His Personal Copy of *Shinkokinwakashu*

FUJII Yoshiaki

#### Abstract

This paper reprints Motoori Norinaga's handwritten honka notes in his personal copy of *Shinkokinwakashu*. The manuscript consists mainly of notes of *honka*. The purpose of the research is to lay the ground of a study on Motoori's interpretation of *waka*, especially on that of *honkadori*. For the main purpose, I am concerned only about notes relevant to *waka* identified as *honkadori* in *Mino no Iezuto*. The total number of *honkadori* in *Mino no Iezuto* is 172, and that of handwritten manuscript in *Shinkokinwakashu* by Motoori is 220. As a result, it is found that the manuscript by Motoori in *Shinkokinwakashu* is almost identical to Keichu's writing. It suggests that Motoori makes his hand manuscript for memorandum of Keichu's commentaries. But it does not mean that Motoori's manuscript is worthless. Because he exchanges some of Keichu's commentaries when he writes his own commentary on *Shinkokinwakashu*, that is, *Mino no Iezuto*. Therefore, by the contrast between Keichu's commentary and Motoori's reception of Keichu and his change, we can analyze how Motoori criticizes former commentaries mainly on *Honkadori* and makes up his idea of the interpretation. Moreover, it is also necessary that the content of this manuscript is introduced because this manuscript has almost never been dealt with mainly for the study on Motoori's interpretation of *waka*.



## 目次

はじめに

凡例

翻刻

## はじめに

本研究ノートは、本居宣長の本歌取解釈に関する総合的な研究の基礎的作業としての位置を占めている。内容は、本居宣長記念館所蔵の宣長手沢本『新古今和歌集』において書入がなされている本歌の部分的な翻刻である。宣長による新古今歌に対する注釈書である『美濃の家づと』は、『新古今和歌集』から696首を抄出し、評釈等を付したものであるが、そのうち宣長が本歌取歌とみなしていると考えられるものは172首を挙げることができる。ここで翻刻するものは、その172首について宣長手沢本『新古今和歌集』において書入が行われている本歌、及びその他のコメントや引用文である。やや異例な方法ながら翻刻が部分的である理由を述べれば、紙幅の関係もさることながら、『美濃の家づと』において指摘された本歌と、手沢本『新古今和歌集』に書入れられた本歌の異同を調査することで、宣長の本歌取解釈をより実証的に記述することを目的としているためである。また管見の限り宣長手沢本『新古今和歌集』の内容に具体的に言及した論考は見当たらず、まずは部分的にでも手沢本における書入の実態を報告することを急務と考えるためでもある。

あらかじめ宣長手沢本の本歌書入の特徴を述べれば、その大部分が契沖による『新古今和歌集』への書入の引き写しである。数字で示せば、今回収集した宣長手沢本における本歌、及びその他の書入は合計220項目に及ぶが、そのうちの実に190項目が契沖による書入と一致している。それゆえ宣長手沢本『新古今和歌集』は、第一義的には契沖書

入のメモという事になる。この手沢本がそれだけの意味しか持たないのならば、わざわざ契沖書入と大部分が一致しているものを翻刻する必要はないだろう。しかし、この手沢本に書入れられた契沖由来の本歌を、『美濃の家づと』で宣長が本歌として認定したものと照合することで、以下のような結果を得ることができた。すなわち、契沖書入と宣長手沢本の書入において一致する項目190首の内、45項目を『美濃の家づと』では採用していない、あるいは異なる本歌を挙げて解釈を行っていることが判明したのである。この結果から我々は宣長と契沖の本歌認定に対する差異を具体的に把握し得る端緒を得ることができ。それゆえ宣長の本歌取解釈の特徴を実証的に記述する上で今回の調査は不可欠な作業でもあるということが出来る。

宣長が手沢本とした版本書誌については、すでに本居宣長記念館より過不足のない情報が提供されているため、それを引用するに留める。

## 『新古今和歌集』

版本・宣長書入本・20巻4冊。源通具等撰。袋綴冊子装。藍布目表紙。縦27.7cm、横19.2cm。匡郭、縦21.8cm、横32.5cm。片面行数12行。墨付(1)64枚、(2)52枚、(3)46枚、(4)67枚。外題(題簽・墨書)「新古今歌集」。内題「新古今和歌集巻第一」。柱刻「新古一、(丁数)」。小口「一、春夏秋冬、新古」等。蔵書印「鈴屋之印」。

## 【序】

「仮名序」「真名序」。

## 【刊記】

「貞享二乙丑年九月中旬、田中庄兵衛梓」。

## 【参考】

『宝暦二年以後購求謄写書籍』宝暦8年10月条に「一、新葉集、三、三夕、同、一、新古今集、三、四夕」と記される。宣長が使用した『新古今集』には「廿一代集」本もあるが、日条では版型も大きな本書を使用したか。朱や墨で夥しい校合や書き入れ、付箋な

どが施される。匡郭は中央に境無く両面に通じる。一

最後に宣長の新古今研究について簡便な年譜を付す。

宝暦七年（二七五七）…京都遊学から松坂へ帰郷（二八歳）  
 宝暦八年（二七五八）…新古今集購入（二九歳）  
 明和三年（二七六六）…第一回新古今集講義開始（三七歳）  
 明和六年（二七六九）…第一回講義終了（四〇歳）  
 天明七年（二七八七）…第二回新古今集講義開始（五八歳）  
 寛政二年（二七九〇）…門人大矢重門に新古今集の抄を送る  
 （六一歳）

寛政三年（二七九一）…正月以前に『新古今集美濃の家づと』成稿（六二歳）か。十月、第二回講義終了（六二歳）<sup>二</sup>

## 凡例

- 一、『美濃の家づと』で本歌が指摘されている歌の番号をすべて挙げ、その直下に書入の翻刻を掲げた。
- 二、漢字・仮名の区別、仮名遣、送仮名、振仮名などは底本通りとした。
- 三、朱墨の別は全て（朱）（墨）として注記した。
- 四、契沖書入と一致しないものには「▼」を、また『美濃の家づと』と一致しないものには「＊」をそれぞれ注記した。
- 五、平仮名、片仮名とも通行の字体に統一した。
- 六、『美濃の家づと』では本歌が指摘されているものの、手沢本では本歌等の書入の無いものについては「記載なし」と記した。
- 七、歌番号は『新編国歌大観』に拠った。なお、筑摩版『本居宣長全集 第三巻』、及び岩波版『契沖全集 第十五巻』に付されている歌番号は旧編の『国歌大観』の歌番号に従うため、それらのテ

クストとは一部番号の齟齬が生じることを断っておく。<sup>三</sup>

## 翻刻

- 17（朱）古今（墨）本歌へ谷川ニ（朱）トクル氷ノヒマゴトニ（墨）へ花ノカラ（朱）風ノタヨリニタクヘテゾ
- 37（墨）へキミヲ、キテ（朱）アタシコ、ロヲワカモタバ
- 40（墨）へテリモセズ
- 45（墨）へ月ヤアラヌ
- 46（墨）へ月ヤアラヌ
- 52＊（朱）古（墨）へ色ヨリモ（朱）カコソアハレト
- 52＊（朱）拾雑春 管万 こちふかはにほひおこせよ梅花あるしなしとてはるをわするな
- 53（墨）へオリツレハ袖コソニホヘ梅ノハナアリトヤコ、ニウクヒスノナク
- 59記載なし
- 82（朱）古今（墨）へオモフトチハルノ山ヘニウチムレテソコトモシラヌタヒネシテシカ
- 91（朱）万九 長歌 白雲のたつたの山の瀧のうへのをくらのみねに咲をせる桜の花は云々
- 93（朱）万十一 いはねふみかさなる山にあらねともあはぬ日おほく恋わたるかも
- 96（朱）後撰（墨）へイソノ上フルノ山ヘノサクラハナウヘケントキラシル人ソナキ
- 98（朱）万四 朝日かけにほへる山にてる月のあかざる君を山こしにおきて
- ▼＊（朱）壬二集 花さかりひかりのとかに出る日につれなくきえぬよものしら雪
- 126（朱）古今 みても又またもみまくのほしければなるゝを人はいとふへらなり

- 128 (朱) 万 拾 沙弥満誓 よの中をなに、たとへん朝ほらけこき行  
ふねのあとのしらなみ
- 134 (朱) 古今 (墨) へケフコスハ (朱) アスハ雪トソ
- 135 記載なし
- 136 記載なし
- 139 (朱) 古今 た、みね (墨) へ風フケハ峯ニ別ル、シラクモノタ  
エテツレナキキミカコ、ロカ
- 140 (墨) へワヒヌレハ (朱) ミヲウキクサノ
- 144 (朱) 古今 (墨) へアカテコソオモハン中ハハナレナメソヲタニ  
後ノワスレカタミニ
- 149 (墨) へクレカタキ夏ノ日クラシナカムレハソノコト、ナクモノソ  
カナシキ
- 169 \* (朱) 貫之集 今までにのこれる岸の藤なみは春のみなどのとま  
りなりけり
- \* (朱) なこりをは松にかけつ、百とせの春のみなどにさけるふち  
なみ
- 171 (朱) 後撰恋一 よみ人しらす うちかへし君そ恋しきやまとなる  
ふるのわたの思ひ出つ、
- 177 (墨) へケフミト春ヲ思ハヌトキタニモタツコトヤスキ花ノカケ  
カハ
- 179 \* (朱) 花そめとは月草の花にてそむるをいへり花の色にそめした  
もと、よめるはその心桜色なれば今のつ、けやう似る事にて誤れり
- ▼ (墨) へ色ミエテウツロフ物ハ
- 201 (朱) 楽天詩 (墨) 蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中
- 207 (墨) 後拾 (朱) 夏 へアツマチノオモヒテニセンホト、キスオヒ  
ソノモリノヨハノ一コエ
- (朱) 此歌の事平家物語にみえたり
- 209 (朱) た、みね あり明のつれなくみえしわかれよりあかつきはか  
りうきものはなし
- 214 (朱) 拾遺 人丸 (墨) へタノメツ、コヌヨアマタニナリヌレハ
- マタシトオモフソマツニマサレ
- 215 (朱) 古今 (墨) へコエハシテナミタハミエヌホト、キスワカコ  
ロモテノヒツヲカラナン
- 216 (朱) 古今 (墨) へホト、キスナカナク里ノアマタアレハナヲウ  
トマレヌオモフモノカラ
- 232 (朱) 万十一 (墨) へコヒシナハコヒモシネトヤ玉ホコノミチユ  
キ人ニコトツテモセヌ
- \* (朱) 新勅雑一 みしまえの玉えのまこもかりにたにとはてほと  
ふるさみたれの空
- 236 (朱) 古今 秋きりのともに立出てわかれなはれぬ思ひにこひや  
わたらん
- 240 (朱) いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしを今になすよし  
もかな
- 254 (朱) 古今 いせ (墨) へ久方ノ中ニオヒタル里ナレハヒカリヲ  
ノミソタノムヘラナル
- \* (朱) あやなくもくもらぬよひをいとふ哉しのふの里の秋のよの  
月為仲
- 255 (朱) 伊勢 (墨) へハル、ヨノ (朱) ホシカ川ヘノ螢カモ
- 256 \* (朱) 万十九 家持 わかやとのいさ、むら竹ふく風に声のかそ  
けきこの夕かも
- (朱) 風生竹夜窓間卧 月照松時臺上行
- 258 \* (朱) あさか山影さへみゆる山井のあさき心は吾思はなくに  
右歌古今両序小町集にあさくは人を思ふ物かはとあり後世かく誤れり
- (墨) へムスフテノ (朱) シツクニ、コル山井ノ
- 281 (朱) 古今 (墨) へオフノウラニ (朱) カタエサシオホヒ
- 282 (朱) 古今 みつね (墨) へ夏ト秋トユキカフソラノカヨヒチハ  
カタヘス、シキ風ヤフクラン (朱) 本歌をはなれては行あひの風  
すこしたしかならぬにや
- 289 (墨) 詞花 清胤僧都 へキミスマハトハマシモノヲツノクニノイ  
カタノモリノアキノハツカセ

- 293 \* (朱) 伊勢 野とならはうつらとなりて鳴をらんかりにたにやは  
君はこさらん
- (朱) 今そしるくるしき物と人またん里をはかれすとふへかりけり
- 296 (朱) 万十 鴈かねの寒くなくより水くきの岡のくす葉も色付にけり
- (朱) 後拾秋上 恵慶 まくす原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋はきにけり
- 297 (朱) 後撰雑 我ならぬ草葉もものはおもひけり袖よりほかににおけるしら露
- 301 (朱) 万八 衣手にみしふつくまでうゑし田を引板われはへまもれるくるし
- \* (朱) 文治六年 五社百首 早苗 ふしみつやさはたのさなへとるたこは袖もひたすらみしふつくらん
- 320 記載なし
- 349 ▼ \* (墨) へ今ヨリハウヘタニ見シ花ス、キホニイツルアキハワヒシカリケリ
- (朱) 拾恋二 勝観法師 しのはれはくるしかりけりしの薄秋のさかりになりやしなまし
- 363 ▼ (朱) 源氏明石に はるくとも、と、こほりなき海つらなるに中々春秋の花紅葉のさかりよりはたゝそこはかとなくしけるかけともなまめかしきに云々
- ▼ (朱) 紫式部日記 花鳥の色をも音をも春秋に行かふ空のけしき月の影霜雪をみてその時来にけりとはかり云々
- 364 (朱) 伊勢 思ひあらはむくらの宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも
- 366 (朱) 古今 春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかざる花のみゆらん
- \* (朱) 秋風はいたらぬ袖もなき物を 順徳院
- 368 \* (朱) 上に 吹むすふ風はむかしの秋なから有しにもあらぬ袖の露かな
- 380 (朱) 古今 素性 いつくにか世をはいとはん心こそ野にも山にも  
まとふへらなれ
- \* (朱) 新勅 相模 いかにして物思ふひとのすみかには秋より外の里をたつねん
- 389 (朱) 古 草も木も (墨) ナミノハナニソ秋ナカリケル
- 391 (朱) 古今 久かたの月のかつらも秋はなほもみちすればやてりま  
さるらん
- 393 (朱) 古今 宮城のゝもとあらの小萩露をおもみ風をまつこと君を  
こそまで
- 397 (朱) 古 (墨) へ月ミレハチ、ニモノコソ (朱) カナシケレ
- 412 記載なし
- 420 (朱) 古今 さむしろ (墨) に (朱) 衣かたしきこよひもや我をまつらんうちのはしひめ
- 473 (朱) 源氏 すゝむしの声のかきりをつくしてもななきよあかするなみたかな
- 478 \* (朱) 古今 里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまかきも秋の  
野らなる
- (朱) 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
- 484 記載なし
- 487 (朱) したりをにとはなかくしよにとくなり
- 493 \* (朱) 夫木十三 忠定 はれゆくはまきの嶋風色見えてやそうち  
人の袖の朝きり
- \* (朱) 建永元年寄合 後久我太政大臣 (墨) 通光云也  
くれはまたいつくにやと  
をかりのなくみねにわかるゝ袖の秋きり
- 515 (朱) 箒木に うちらはふ袖も露けき床夏にあらし吹そふ秋もきに  
けり
- \* (朱) 続千秋下 山家日 入道二品親王道助 とふ人もあらし吹  
そふみ山へに木葉分くる秋のよの月
- 517 ▼ (墨) なけやく蓬かそまのきりくす過行秋はけにそかなしき
- 522 記載なし



- 532 ▼(墨) へクサモ木モイロカハレトモワタツウミノナミノハナニソ  
アキナカリケリ
- 534 (墨) へワカヤトハミチモナキマテアレニケリツレナキ人ヲマツト  
セシマニ
- 537 (朱) 古今 つらゆき 白露もしくれもいたくもる山はした葉のこ  
らす色付にけり
- 562 ▼\*(朱) 六二 わか恋は大えの山の秋風の吹てし空の声にそ有け  
る
- 566 (朱) 拾冬 僧正遍昭 から錦枝にひとむらのこれるは秋のかたみ  
をたゝぬなりけり
- 581 (朱) 上に引次の万よふの歌をとらせ給へり
- 614 ▼(墨) 須磨巻云枕ヲソハタテ、ヨモノアラシヲキ、タマフニナミ  
タ、コ、モトニ立クルコ、チシテナミタオツトモオホエヌニマクラ  
モウクハカリニナリニケリ
- (朱) 冬の夜のなかきをおくるほとにしもあかつきかたのつるの一  
こゑ
- 615 (朱) 万二 人丸 さゝの葉はみ山もさやにみたれとも我は妹思ふ  
わかれきぬれは
- 617 (墨) 花宴巻オホロ月夜 へウキミヨニヤカテキエナハタツネテモ  
クサノハラヲハトマシトヤ思フ
- ▼(墨) へタツヌヘキクサノハラサヘシモカレテタレニトハマシ道  
シハノツユ
- 635 (朱) 源氏権 とけてねぬねさめさひしき冬の夜にむすほはれつる  
夢のみしかさ
- \*(朱) 六百番 定家 とけてねぬ夢ちも霜にむすほゝれまつしる  
秋のかたしきの袖
- 639 (朱) 後拾 (墨) へサヨフクルマ、ニミキハヤ氷ルラントヲサカ  
リユクシカノウラナミ
- \*(朱) 惠慶法師 拾冬 天原空さへさえやわたるらんこおりとみ  
ゆる冬のよの月
- 652 \*(朱) 万十一 行水にかすかくこときわか命妹にあはんとうけひ  
つるかも
- (朱) 古今 行水に数かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなり  
けり
- 671 (朱) 万三 くるしくもふりくる雨かみわかさきさのゝわたりに家  
もあらなくに
- 719 (墨) ヌレテホス――
- 737 (朱) 古今 素性 ぬれてほす山路の菊の露のまもいつかちとせを  
われはへぬらん 玉くしはさか木に木綿かけたるをいふと延喜式に  
見えたり日本紀に八十玉簪といへり伊勢にはかきるへからす
- 740 ▼(墨) 高砂の松もむかしの友ならなくに
- 746 (朱) わかいほは都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり
- \*(朱) 補陀洛の南の岸に堂たて、今そさかえんきたの藤なみ
- 829 \*(朱) 後拾哀 実方 うたゝねのこのよの夢のはかなきにさめぬ  
やかての命ともかな
- \*(朱) 千恋三 小侍従 みし夢のさめぬやかてのうつゝにてけふ  
とたのめしくれをまたはや
- (朱) 源氏若菜 みてもまたあふまねなる夢のうちにやかてまき  
るゝわかみともかな
- 835 (朱) 拾哀 藤原為頼 よの中にあらましかはと見し人のなきかお  
ほくもなりにけるかな
- 891 (朱) もとしけ ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末のまつ山波  
こさしとは
- 932 (朱) 後拾夏 重之 夏かりの玉江のあしをふみしたきむれぬる鳥  
のたつ空そなき
- 934 (朱) 古今 君をおもひおきつの濱になくたつのたつねくれはそ有  
とたにきく
- 947 (朱) 万一 君か世もわかよしれやはしろの岡のかやねをいさ  
むすひてん
- 958 (朱) なりひら しなのなるあさまのたけにたつけふりをちこち人

- のみやはとかめむ
- 959 (朱) 古恋一 (墨) ムフクレハクモノハタテニ物ソ思フアマツ  
ソラナル人ヲコフトテ
- 964 記載なし
- 968 (朱) 立わかれいなはの山のみねにおふる松としきかは今かへりこ  
ん 行平
- 970 (朱) 源氏うきふね 波こゆるころともしらす末のまつ待らんとの  
みおもひける哉
- 973 (朱) 万十一 難波人あし火たくやはすしたれとおのかつまこそと  
こめつらしき すゝろは煤によせたり
- \* (朱) 月清集 蚊火 すゝろなるなにはわたりのけふり哉あし火  
たく屋にかひたつる比
- 980 (朱) 源氏 須磨 恋わひてなくねにまかふ波の音は思ふかたより  
風やふくらん
- 982 記載なし
- 987 (朱) 古今 年ことに花のさかりは有なめとあひみんことはいのち  
なりけり
- 1031 (朱) いせ うつせみの羽におく露の木かくれてしのひくぬる、  
そてかな
- 1032 (朱) 後夏 かつらのみこの螢をとらへてといひ侍りければわらは  
のかさみの袖につゝみて つゝめともかくれぬものは夏むしの身よ  
りあまれる思ひなりけり 大和物語異説あり
- (墨) タサレハ螢ヨリケニモユレトモ
- 1033 後恋六 思ひつゝへにける年をしるへにてなれぬものはこゝろな  
りけり
- 1036 (朱) 古今 わか恋は人しるらめやしきたへのまぐらのみこそしら  
はしるらめ
- (墨) 枕ヨリ又シル人モナキコヒヲ
- 1073 (朱) よしたゝ ゆらのとをわたる舟人かちをたえ――  
▼\* (朱) 春庵曰 しら波の跡なき方に
- \* (朱) 本歌丹後掾にて述懐をかぬれば此ゆらは丹後のゆらなるへ  
し
- 1074 (朱) 古今 しら波のあとなきかたにゆくふねも風そたよりのしる  
へなりける
- 1084 (朱) 万葉寄藻 しほみては入ぬるいその草なれやみらくすくなく  
こふらくのおほき 此草といふはすなはち藻なり
- 1106 (朱) 古今 タくれは雲のはたてに物そおもふあまつ空なる人をこ  
ふとて
- 1108 (朱) 古今 すまのあまの塩やき衣をさをあらみまとはにあれや君  
か来まさぬ  
(朱) 十寸<sup>スギ</sup>
- 板もてふける板めのあはさらはいかにせんとかわかねそめけん
- \* (朱) 十寸板とかけるを今の本にもすき板と点せるは杉板なり但  
彼集中に十をすとよめる例なし只そとのみよめればそき板にて今も  
いふそきなり殺板とかくへし
- 1117 \* (朱) 後恋三 みつね いせの海に塩やくあまの藤衣なるとはす  
れとあはぬきみ哉
- (墨) ナレユクハウキヨナレハヤスマノアミノシホヤキ衣マトホ  
ナルラン
- 1118 ▼ (墨) 古 ミチノクニアリト云ナル名取川ナキナトリテハクルシ  
カリケリ
- 1119 (朱) 後五拾 元良親王 わひぬれは今はた同しなにはなるみをつ  
くしてもあはんとそおもふ
- (朱) 古今 名取川せゝのうもれ木あらはれはいかにせんとかあひ  
みそめけん
- \* (朱) 拾遺愚下 せきわひぬ今はた同しなとり河あらはれはてぬ  
せゝのうもれ木
- \* (朱) 為家卿本歌は今はた同し名とつゝけたるにはあらぬをとの  
たまへり
- 1128 (朱) 伊勢 秋かけていひしなからもあらなくに木葉降敷えにこそ

ありけれ

1135 (朱) 古今 わか恋はゆくへもしらすはてもなしあふをかきりとおもふはかりそ

1138 (朱) 有明のつれなくみえしわかれより

(朱) 大かたは月をもめてしこれその

1141 ▼\* (墨) 和泉式部 へモノオモヘサハノ螢モ我身ヨリアクカレイツル玉カトソミル

(墨) 貴布禰明神御返 へオク山ニタキリテオツルタキツセノ玉チルハカリモノナ思ヒソ

1145 (朱) 拾恋一 いかにしてしはしわすれんいのちたにあらはあふよのありもこそすれ

1153 (朱) 万九又一 河島皇子 山上憶良 (墨) へシラナミノ(朱) ハマ、ツカエノ 此集には皇子の歌とす

1201 (朱) 後拾雑上 松かせは色やみとりに吹つらん物おもふ人のみにそしみける

記載なし

1204 (朱) 古今 君こそすはねやへもいらしこむらさきわかもとゆひに霜はおくとも

▼ (墨) 君ヤコン我ヤユカンノイサヨヒニ

1272 (朱) 拾 直幹 わするなよとは雲ぬになりぬとも空行つきのめぐりあふまで

1273 (朱) 拾恋四 いせ はるかなるほとにもかよふこゝろ哉さりとして人のしらぬものゆゑ

▼ (墨) 恋すれは我みはかけと成にけりさりとて人にそはぬ物故

(朱) 狭衣歌上のことし

(朱) 二首素性歌をとる

1276 1275 記載なし

1284 (朱) 古今 君をおきてあたし心をわかもたは末のまつ山なみもこ

えなん

1285 ▼ (墨) ワカ宿ヤトハ道モナキマテアレニケリツレナキ人ヲマツトセシマニ

1286 (朱) 後拾雑三 和泉式部 物をのみ思ひしほとにはかなくてあさちか末によはなりにけり

\* (朱) 新続恋二 保季 跡たえてはてはあさちになりぬともたのめし宿のむかしわするな

1287 (朱) 拾恋三 人丸 たのめつゝこぬよあまたになりぬればまたしと思ふそまつにまされる

1288 \* (朱) 夕顔 ほのかにも軒はのをきにむすはすは露のかことを何にかけまし

▼ (朱) 蓬生 尋ねてもわれこそとはめ道もなく深きよきものとこのゝろを

1292 (朱) 古今 風ふかは峯にわかるゝ白雲のたえてつれなき君かこゝろか

記載なし

1305 (朱) 古今 (墨) へワキモコカ衣ノスソヲ吹カヘシウラメツラシキ秋ノハツ風

1312 (朱) 拾恋四 (墨) へ手枕ノスキマノ風モサムカリキ身ハナラハシノ物ニソアケル

1313 (朱) 此尾上の宮は万廿に高圓のをのへの宮はあれぬともたゝしき君のみなわすれめやこれにや此外尾上宮といへる宮み及はす

(朱) 夫木十五光明峯寺撰政家六百歌合 範宗卿 露しくれいくよをかけて染つらん尾上宮の秋のもみちは 万廿依興各思高圓離宮處

作歌五首 高圓の野のうへの宮はあれにけりたゝし、君か御世遠そけは 家持次今城真人歌次の歌は高圓の野とよめり然れば高圓宮本

名にてそれを野の上の宮ともをのへの宮ともよめるなり

1315 ▼ (墨) へヨヒく二枕サタメン方シチナイカニネシヨカ夢ニミエケン

1317 ▼\* (朱) 紫式部 めくりあひてみしやたれともわかぬまに雲かく



- れにしよはの月かな
- 1319 (朱) 古今 小町 今とはとて我身しくれにふりぬれはことの葉さへに色かはりけり  
(墨) うろひにけり
- 1320 (朱) 六 人しれぬ思ひするかのくに、こそ身をこからしのもりは有けれ
- \* (朱) 君こふとわれこそむねをこからしのもりとはなしにかけになりつ、
- 1322 (朱) 万十一 わかせこをわかこひをれはわかやとの草さへ思ひうらかにけり
- 1324 \* (朱) 後拾恋二 さねかた わすれすよまたわすれすよかはらやの下たくけふり下むせひつ、
- (朱) 同恋四 長能 わかこゝろかはらんものかかはらやの下たくけふり下、  
(わきかへりイ)
- 1326 \* (朱) 此歌の詞つかひ女の歌にかなはすかへすゝまなふへからす
- 1327 (朱) 古今 こひしくはとふらひ来ませわか宿はみわの山本杉たてゐるか
- 1328 ▼ (墨) 色みえてうつろふ物は云々
- 1331 ▼ (墨) 明石巻 ヒトリネハ君モシリヌハツクゝトオモヒアカシノ浦サヒシサヲ
- 1332 ▼ \* (朱) 和泉式部 塩のまによものうらゝ尋ぬれと今は我身のいふかひもなし
- (朱) 源氏須磨 いせの海や塩干のかたにあさりてもあふかひなきはわかみなりけり  
(墨) うき
- (付箋) (朱) 万四 おうの海の塩干のかたのかた思ひやゆかん道のなかくてを
- ▼ \* (付箋) (朱) 後撰恋三 長谷雄朝臣 塩のまにあさりするあまもおのかよゝかひありとこそ思ふべらなれ
- 1333 ▼ (墨) 拾 ムネハフシ袖ハ清見か関ナレヤ煙モ波モタゝ又日ソナキ
- 1334 (朱) 伊勢 (墨) へ秋カケテイヒシナカラモアラナクニコノハフリシクエニコソアリケリ  
(朱) れ
- 1336 (朱) 万十二 白妙の袖のわかれをかたみしてあら津のはまにやとりするかも
- (朱) 同 しろたへのそでの別はをしけれと思いたれてゆるしつるかも
- (朱) 六帖 吹くれはみにもしみける秋風を色なきものとおもひけるかな
- 1455 \* (朱) 新勅春下 信實 山さくら咲ちるときの春をへてよはひは花の陰にふりにき
- \* (朱) 続古 定家 さくら花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる浅ちふの
- \* (朱) 此歌の事春さそはれぬ人のためとやの所にあり
- 1469 1466 記載なし
- \* (朱) 拾玉集 もろこしの人に見せはやから崎にさゝなみよするしかのけしきを
- \* (朱) 千 範綱 さゝ波やなからの山の峯つゝき見せはや人に花のさかりを
- 1519 ▼ (墨) へコ、ロアラン人二見セハヤ云々
- 1522 ▼ (墨) へ今コントイヒシハカリニ
- (朱) 古今 木まよりもりくる月の影見れは心つくしの秋はきにけり
- \* (朱) 狭衣 なけきわひぬる夜の空にゝたる哉 下句同
- 1547 (朱) 六帖 天の戸をおし明かたの月みれはうき人しもそこひしかりける 天児屋命のはからひにて天窟の明し心なり
- 1623 (朱) 古今 山さとは物のさひしきことこそあれよのうきよりはすみよかりけり
- 1637 (朱) なりひら (墨) へ住ワヒヌ今ハカキリトオタ山ニツマ木  
(ヤマ)
- 1646 (朱) 後雑一 行平 (墨) へサカノ山ミユキタエニシ芹川ノ

チヨノフル道アトハアリケリ

\* (朱) 三代実録四十二紀伊郡芹川野トアリせり川のちよのふる道といへり誤といふへし

1659 ▼ (墨) コレタカノミコ 夢かとも何かおもはんうき世をはそむかさりけんほとそくやしき

1661 記載なし

1668 (朱) 古今 君しのふ草にやつるゝふるさとはまつむしの音そかなしかりける

1672 (朱) 古今 友のり ふるさとは見しこともあらずをのゝえの朽し所そこひしかりける

1725 (朱) 伊勢物語にむかし男狩の使より帰りきけるに大よとのわたちにやとりていつきの宮のわらはへにいひかけゝる みるめかる方やいつこそさをさしてわれにをしへよあまのつりふね むかし男伊勢国にゐていきてあらんといひければ女大よとの濱におふてふみるからに心はなきぬかたらはねとも といひてましてつれなかりければ男 袖ぬれてあまのかりほすわたつみのみるをあふにてやまんとやする

1758 (朱) 古今 秋の夜の露をは露とおきながら雁のなみたやのへをそむらん

1759 (朱) 古今 (墨) へカタイトラ (朱) コナタカナタニ

1760 (朱) 古今 ふしておもひおきてかそふる万代は神そしるらむわかきみのため

1761 (墨) へワタツミノオキツシホアヒニウカムアハのキエヌモノカラヨル方モナシ (朱) 古今雑上

1766 (朱) 古今 雑 しかりとてそむかれなくにことしあれはまつなけれぬあなうよの中

1803 \* (朱) 文選 欲隕之葉无所假烈風 将墜之泣不足繁哀響

(朱) 橋姫に 山風にたえぬ木葉の露よりもあやなくもろきわかなみたかな

\* (朱) 葵に 宮は吹風につけてたに木葉よりけにもろき御涙はま

してころあへ玉はす

▼\* (朱) 六 貫之 いくひさゝ我ふりぬれや身にそへてなみたももろくなりけるかな

1932 (朱) 古今恋一 素性 音にのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへすけぬへし

1939 \* (朱) 往生要集云 第五

# 〈付記〉

本稿執筆にあたり、本居宣長記念館の吉田悦之館長には、貴重な資料の閲覧、及び撮影の許可を頂きました。謹んで御礼申し上げます。また撮影機材の協力を頂いた稲吉亮太氏にも感謝申し上げます。

なお本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費(DC2)による研究成果の一部である。

## 注 釈

一 「本居宣長記念館HP 宣長の使った古典のテキスト」([http://www.norinagakenkan.com/norinaga/kaishetsu/koten\\_text.html](http://www.norinagakenkan.com/norinaga/kaishetsu/koten_text.html)) 二〇一七年九月一日現在。

二 以上の年表は『本居宣長全集 第三巻』大久保正解題を参照して作成。  
三 参照、照合のために用いたテキストは、『美濃の家づと』では『本居宣長全集 第三巻』(筑摩書房・一九六九年)、契沖書入では『契沖全集 第一五巻』(岩波書店・一九七五年)を中心に、適時『新古今集古注集成 近世新注編二』(笠間書院・二〇〇四年)も参照した。

## 【参考資料】

上、第一冊十丁ウ／十一丁オ。中、第二冊六丁ウ／七丁オ。下、第三冊十六丁ウ／十七丁オ。



